

「救いを宣言される主イエス」

イザヤ書 56章 1節
マタイによる福音書 15章 21節～28節

説教 川俣 茂 牧師 (清教学園中学宗教主事)

主イエスはパリサイ派や律法学者たちと議論を進めることによって、ご自身の使命や彼らとの違いをはっきりとさせていきました。その過程でツロとシドンの地方に赴きましたが、そこでも主イエスを必要とする人が待っていました。

娘が悪霊に取りつかれた女性。娘の苦しみを目の当たりにして困惑するこの女性は、主イエスがどのようなお方か知っていたようです。しかしこの女性は「カナンの女」、異邦人でした。その女性に対し、主は一言もお答えにならなかった。弟子たちは弟子たちで、逆に何とかしてほしいと思っていたようです。残念ながら心のもっていない、共に歩むという姿勢のない弟子たちの姿が見てとれます。

主イエスは一回目は沈黙によって、二回目は直接的な宣言によって、女性の願いを拒絶しました。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。神の国への道はまず誰よりも、神によって選ばれたはずの契約の民、イスラエルの民に示されなければならない、またそれこそが救い主の使命でもあったということです。

しかしそれを聞いても、この女性は逆に主の前にひれ伏し、すべての希望を託すかの如く「主よ、わたしをお助けください」と語りますが、それに対する主の答えは「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」という、いわば屈辱的な表現の答えでした。

それでもこの女性はすべての信頼を主に置き、「主よ、お言葉どおりです」と答えます。あくまでも謙遜と服従の思いをもって、「でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」と。この女性は、救いに関するイスラエルの民の優位性を知っています。もちろん家の子供たちが先だ。しかしここは広い家の食卓のはず。小犬が紛れ込んで、落ちてくるパンくずをいただくことはできるくらいの広さはあるはず。とすると、結果的にパンはこの家の子供たちだけではなく、隣の家はおろか、他の家の子供たちのためにもあるのではないか、そう女性は語っているようです。さらに問題なのは、「この子供たちが皆、本当の意味でそのパンを食べている（与っている）のか」という根本的

な問いが存在していることです。

この女性が求めたものは何も高価なものなどではなく、食卓から落ちる「パンくず」でした。そのパンくずで飢え、そして必要なものが満たされる。主の力、憐れみ、慈しみがいかに大きなものであるか、そしてそれに対する信頼が大きければ大きいほど、結果も私たちの思いを超えたものになっていく。そう考えると、この女性の言葉は「信仰告白」となっている。神が選ばれ、導かれたイスラエルから落ちるパンくずによって、実はそれに与ることができない異邦人たちこそが満たされて、救いに与ることができるという、逆説的な現実が見えてくるのです。

ところで、食卓にいる人々と小犬を対比してみた時、いろいろなことが見えてきます。食卓にいる人々というのは、そもそも食事をする前提でいます。パンが出てくるのも、パンを食べるのも当然だと思っている人々です。極端な言い方をすれば、「安住」「安定」の中にいる人々でしょう。しかし小犬はというと、食うや食わずやの状況で、パンくずはおろか、食べ物に与るといってもそうないかもしれない、「何らかの食べ物に与れたら幸せ」「ここで食べておかないと、またいつ食べ物にありつけるかわからない」というような切実な状況だったでしょう。そう思うと、この小犬は食卓にいる人々とは思いが異なっていた。そういう面からしても、イスラエルの民と本当に救いを必要とする人々との間に「温度差」があっても仕方のない状況だったのかもかもしれません。

この聖書箇所周辺の周辺には、いくつか「パン」に関わる箇所が記されています。5000人の給食や「パン種」についてです。神がイスラエルの民に与えたパン、それは主イエスでした。しかし子供たちはそれを受け入れず、十字架につけて投げ捨ててしまった。「本当のパン」で何であるかもわからずに。

「あなたの信仰は見あげたものである」。言い換えると「信仰は大きい」「信仰は深い」。だからこそ主の応答も「大きく」「深い」ものと、また直接的な宣言となったのです。

(記 説教要約奉仕者)